

教宣 せぶん

「怒り」をカタチに残す

長雨がが続いています。その影響で、先日あるスポーツ大会が雨天順延になりました。2県にまたがる子供の大会ですが、ある大会関係者が「地元の人たちの行いが悪いってもんだな。地元の人には責任をとって頭を丸めてもらわなければならない」と笑いながら発言しました。もちろん冗談です。この大会を開催するに当たって寄付を集め、昨晚から設営や準備にあっていた地元の方のほとんどがその発言を苦笑して聞き流していましたが、一人だけ食って掛かりました。「私たちはこの大会をここ6年で3回も行っている。本来であれば26チームあるのだから、26年に1度で良いところを、です。他チームの事情もあって、率先して引き受けている。用意や準備、片付けにどれだけの労力がかかるとお思いますか？そんな背景や事情を考えれば、冗談でもそんなことは言ってもらいたくない」と強い口調で言いました。その場は一瞬にして静まり返りました。「冗談、冗談だよ。準備する地元のみなさんの苦労をわからないわけがないじゃないか」

地元の方の発言を「オトナ気ない」と思う方もいるかもしれません。冗談を聞き流して耐えた人たちを「立派だ」と思う方もいるかもしれません。しかし、「冗談でもそんなことを言ってもらいたくない」と言わなければ、この大会関係者は、一生、言ってよい冗談と言ってはいけない冗談があることの区別がつかなかったでしょう。一生、言って良いタイミングと言ってはいけないタイミングがあることに気づかなかったでしょう。準備や用意に自分が想像している以上のエネルギーがかけられていることにも気づかなかったでしょう。そして、自分の発言やふるまいに、怒っている人、傷つけられている人がいるということも気づかなかったでしょう。

アクションを起こさなければ、相手は気づかないということは往往にしてあります。いま繰り広げられている私たちと会社のたたかいも、私たちがアクションを起こさなければ、私たちの「怒り」や「戸惑い」や「苦しみ」は決して表に出なかったはずで。経過説明では「断腸の思い」と発言しても、一連の対外的な整理は「喜んで支援金を受け取って代理店になった」になったことでしょう。そこに私たちの「怒り」があったことなど瞬く間に忘れ去られるでしょう。

私たちはこの「怒り」を形に残します。そうすることが日本に働くものへの「光明」になります。